

日付:2014年12月14日／聖書:ルカによる福音書1:26～45

主題:「主があなたと共におられる」

天使は、一人の少女マリアに現れる。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる」と告げる。マリアは当然驚くが、しかし天使の姿に驚いたのではなかった。天使の言葉に驚くのである。それは、「主があなたと共におられる」という言葉。この言葉はユダヤ人の間では、普通に交わされる挨拶で、正確に言えば「神が共にいますように」という祈願の言葉である。その意味は、“神が共におられる”という祝福は、それにふさわしい人物だけに与えられ、誰にでも無条件に与えられるものではないという考えがあった。神殿礼拝を欠かさず、生贄などの捧げものを惜みず、律法の隅々まで忠実に守っている人だけが、“神が共におられる”者にふさわしいと考えた。即ちそれは、裕福でなければならぬということでもあったわけである。

ゆえに、「神が共にいますように」という挨拶は、一般の人たちには、形だけの日常の挨拶の言葉として使われていたものであった。マリアは、ガリラヤのナザレの町の者。ガリラヤは貧富の差が激しく、特にナザレの町は貧しい地域だった。マリア自身、到底神が共にいることなど有り得ない事として捉えていた。しかし、天使はマリアに「主があなたと共におられる」と言う。この言葉は、この世の常識、宗教的解釈とはまるで真逆のこと、非常識なことを語ったことになるわけである。私たちが何かをしなければ、神は共に居てくださらないと思っていたところに、私たちが努力を重ねて、熱心に神を礼拝しなければ神に近づけないと思っていたところに、マリアへの告知があったのである。

マリアが驚いたのは、神の子を宿した驚きというよりも、この世の常識を超えたことにあった。マリアは結婚前ゆえに男を知らないものだった。しかし天使は「神に出来ないことは何一つない」と告げる。その言葉に戸惑い恐れるも、「この身になりますように」と決断する。この決断とは、この世の常識、宗教的倫理観との闘い、抵抗の決断であった。こちらが何かをしなければ、神は共に居てくださらない、努力を重ねて熱心に神を礼拝しなければ神に近づけないと思っていたこの世の常識。結婚をしていなければ子を宿してはいけない、未婚で子を宿せば律法を破ることになり、世間の目に晒されることになる。そういうこの世の常識、宗教的倫理観への闘い、抵抗をしていく決断を、マリアは「神が共に居られる」という言葉から、「神に出来ないことは何一つない」という言葉から決断していく。マリアを理解してくれる人々と共に歩んで行くのである。(神谷)